

「和解と赦しの共同体」

(マタイによる福音書 18:15-20)

今週の福音の直前箇所は、「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」と結ばれます。神はたった一つの命であっても、失われることを望みません。今日の福音では、「罪を犯した兄弟に対して取るべき態度」がテーマです。クリスチャンとして取るべき態度がとても具体的に記されていますが、大切なことはそれが「兄弟を得る」ためである、とされていることです。これは、ことに最近のこの世的な感覚とは全く異なる態度と言えます。芸能人などの「不祥事」が報道されるたびに、インターネットを中心に総掛かりでその人を「叩く」ということをわたしたちは目にします。そこにはその人と兄弟となる、などという姿勢を見出すことはできません。しかし聖書が求める姿勢はそれとは全く異なります。神はたった一つの命が滅びることを望まないからです。だからこそわたしたちは相手を滅ぼすためではなく、「兄弟を得る」ことを目的にしなければなりません。一度の忠告が相手に聞き入れられずとも、「兄弟を得る」ためには、繰り返し忠告することが必要です。まずは一人で、それでダメなら一人か二人の兄弟と共に、それでもダメなら教会という公の場で忠告するように、と主イエスは教えます。それは、その目的が相手を打ち負かすことや、非難や中傷にあるからではなく、「兄弟を得る」ことにあるからです。

「忠告する」という言葉は、「光にさらす」という意味を持ちます。光とは、神の愛と言えます。つまり忠告するとは、わたしたちたった一人の命が滅びることを望まない神の思い、神の愛に相手をさらすことなのです。神はあなたの命も、あなたが罪を犯し、軽んじてしまった命も愛しているのだ、と伝えることが「忠告」することです。そうして、滅びを望まない神の光で相手を照らし、相手の心を神の思いへと向けさせることです。それを聞き入れない相手であっても、辛抱強く最後まで「忠告」することを、主イエスは命じています。

とはいえ、人間にはどうしても赦せない相手がいることがあります。「兄弟を得る」ことをどこまでも求めるなど、自らの力だけではできません。しかし、「二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである。」と言われている通り、わたしたちの中心にはいつも主イエスがおられます。教会とは主イエスが真ん中におられる集まりのことです。たとえ、どうしても赦せない相手がいたとしても、わたしたちの真ん中におられる主イエスが共に願ってくださり、たった一人の命をも滅びることを望まない神の思いがそこにあるからこそ、人間だけではなし得ない、赦しと和解が「教会において」実現します。関係を分断させようとする力がはびこるこの世にあって、神の愛によって結ばれた、赦しと和解の共同体として、主イエスとともに、神の思いとともに歩んでまいりましょう。